

新潟市を含む北海道・東北・北陸の日本海側の十一の市町が「北前船寄港地・船主集落」として日本遺産に文化庁から認定されました。日本遺産は、地域の歴史的魅力や特色を通して日本の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。つまり、「日本にはこんな歴史や景観が各地にあるから、そのテーマにそって各地をめぐったらいかがですか」という提案です。



みなとびあ 副館長 伊東 祐之

「北前船寄港地・新潟」

今回のストーリーの軸が「北前船」です。江戸時代から明治前期にかけて日本海側の物流の中心を担ったのが北前船です。北前船に

役を立てることができました。ご夫婦との会話を楽しみながらの下町を巡り小澤邸から齋藤邸などを訪ねながら「砂山のキワはどの辺？」「新潟の町はなぜ砂丘地から今の町に移転したの？」などに答えながら、お互いに話が花が咲き、時計を見ると、すでに十二時三十分になっていました。この先のスケジュールを伺うことも無く、昼食の場所までご案内して、ガイドを終えました。



「みなとびあ館内・白山神社大船絵馬のレプリカ」

港に買いたい商品があり、商品が高く買ってくれ第一条件です。新潟には越後平野の農民たちが生産する米があり、町の職人が使う原料や農産物が消費する品が必要でした。また、新潟町にはその売買を助ける廻船問屋があり、商品を売買・流通してくれる卸問屋があり、資金を融通してくれ大商人がいました。また、実際に商品を運搬する川船や人足も用意されていました。新潟町には船頭や船員が人々もいました。これが、新潟町が北前船の寄港地となれた理由であり、江戸時代から湊町と名乗ってきた所以です。



美術館庭園

「海の庭」「山の庭」があり散策も楽しめます。西大畑界隈は十分に楽しめる場所が多い所です。

# 新潟シティガイド

No. 29号  
《編集発行》  
新潟シティガイド  
《発行人》  
関 克人

- ・聞いたことは忘れる
- ・見たことは思い出す
- ・体験したことは理解する
- ・発見したことは身につく

## 私のガイド日記



齋藤 勝子

五月二日、東京から五十代のご夫婦のガイドを致しました。前日は携帯メールで待ち合わせ場所の確認と「観光循環バス」のご案内をして、当日は歴史博物館前バス停での待ち合わせ、ガイドが始まりをもう何回も経験していても、この緊張感はいつも変わりません。きつとお越しにならないお客様も同じではないでしょうか。



鳥屋野ガイド研修のリーダー

ご夫婦は前日、東京からお越しになり、午後「朱鷺メッセ」古町界隈と日和山を回られたとの事でした。まずは、みなとびあをご案内しながら、新潟にお出でになった切っ掛けは「プラタモリ」の「新潟は砂のまち」とか。ご夫婦共に「東京スリパチ学会」の会員であるとお話でした。

このガイド前の四月二十九日に支援センターで野内隆裕氏の座学と「砂の町」を実際に歩く研修に参加しており、すぐに

爽やかな五月の風の中、楽しいガイドでした。いつも思うのはガイドは、お客様の力も借りて成り立つことです。また、話の内容な

どの収集は、日頃から疑問に思う点はアンテナを張って、知りたい気持を持つて入れれば必ず受信できるという事です。

### 広報からのお願い

- 1 広報紙「新潟シティガイド」の原稿依頼  
広報紙の紙面は、会員の皆さんの投稿原稿で成立っています。原稿依頼をお願いすることがあるかと思いますが、ご協力をよろしくお願い致します。
- 2 「新潟まち歩きブログ」への投稿依頼  
「新潟シティガイド」をより多くの方に知っていただくため、投稿をよろしくお願い致します。なお、原稿をいただければ代わって投稿もいたします。

さいいます。昨夜遅く無事に東京に帰着しました。この度はお世話になりました。ありがとうございました。充実した旅になりました。新潟の魅力は奥深く、また訪れたらと思えます。その時はよろしくお願ひいたします。本場に有り難うございました。『メール有り難うございました』お身体を大切に。またのお越しをお待ちいたしております。』と返信しました。

「プラタモリ」から「日本遺産・北前船寄港地・新潟」の流れはまち歩き団体としては願ってもないトピックだ。こういうことが起こるんだなあ、と驚く。

広報委員 二瓶 芳枝

### 編集後記

気が付けば日常がまち歩きのアンテナになっている。印刷物や看板、町の景色等、目に入る物が気になる。SNSの情報もまち歩き関係が飛び込んでくるし、世間もまち歩き志向になっていくように感じられる。

NHKで現在放映されている人気番組「プラタモリ」、昨年ついにその番組が新潟にやってきました。案内人は新潟シティガイドの生みの親のひとりでもある、まち歩き達人、野内隆裕さんです。その放送以降、観光客の方から、「プラタモリ」で歩いたコースを歩きたいという声を多く聞くようになりました。

それではと、昨年観光サミットで野内さんと「プラタモリ」を歩かせて頂いた伊藤頼子さんと小野塚で案内さんにシティガイドで案内してよしいか、とお話に行ってきたところ、快諾して頂きました。

役員会でも取り上げて頂き、四月二十九日(土)、このコースをやってみようという方達が集まって頂き、講習会を開かせて頂きました。

案内人は番組と同じ野内さんご本人が引き受けてくださいました。また、まち歩きの際にはサプライズペンシャルゲストとして観光

有難かったです。ガイドの方の中には、砂の町と言われても実際に目に見えない等、とおっしゃる方もいらっしゃいます。しかし実際にタモリさんが歩いたコースを歩いてみると、お客さまに「プラタモリ」新



「砂の町にいがた」現地講習会

サミットの時にタモリ役をやった頂いた「マコリ」と久保さんにも一緒に歩いて頂き、野内さんからは、ポイントポイントでタモリさんとのエピソード等も聞きするという念の入れようです。また、野内さんからは、この日の受講者のためにお宝といえる資料の数々も用意して頂き、本

私の担当は七名(内付添人二名)、五メートルも歩かないうちに付添人さんから「ガイドさん、もっとゆっく」と声がかかり早々に反省。次に石の鳥居で彫

六月にしては少し寒い日中途視覚障害者の方々のガイドをしました。

当日のようなガイドをしたら良いのか迷いながら、半分引き受けた事を後悔しながら白山公園へ。始まる前に先輩ガイドから、「情景を説明する。そして体験してもらおうと良い。」と助言をもらいガイドが始まりました。

**貴重なガイド体験 (反省ガイド)**

**平野 マサ子**

「砂の町」コースのガイドに参加して頂きました皆さまには、改めて感謝いたしますと共に、今後ご協力をよろしくお願いいたします。

ガイド終了後、名前を呼ばれてお礼を言われほつとしました。目が見えない人という事を自分意識しすぎて、普段ならもっとお客様に声をかけて色んな話をするのですが、あまり話もはずま

不安が増した後に神社の手水場で手を洗っていただき、こも付添人さんの助けを借りて三名の方が公園の外の石垣に届いた。ここが信濃川の淵だった事を説明。やと皆さんが納得した様子にほつと、次の犬へ。背は低かったのですが足元に段差があったので「危ないです」の声がかかり、ここでは説明のみ。その後休憩、トイレにご案内した。中ま

お客様に合わせた、色んな引き出しを持ったガイドになれるよう頑張ります。



中途視覚障害者の方々をガイド

**私のお勧め スポット**



諸橋 紘一

**花嫁御寮はなぜ泣くのだろうの謎**

イタリア軒別館「蛭」前の「花嫁人形」の歌詞・歌碑の由来は、熟知していたつもりが、この度の一件で間違ったガイドが分かり赤面の至りです。

そのきっかけは、お客様から度々次の質問を受けたことに始まる。それは①「花嫁御寮はなぜ泣くのだろう」の涙は嬉し涙か、悲しい涙か。②「泣くに泣かれぬ花嫁人形」の言葉の意味である。

そこで落谷虹児研究家の新潟文化財観賞会の某氏に教えを乞うた。歌詞の前半の花嫁人形は、二七歳で亡くなった薄幸の母エツと、貧しさゆえに芸者屋へ売られていった幼馴染りの女の子への強い思慕であり、花嫁は母と女の子その者であり、その二人に花嫁衣裳を着せた人形であること。後半の歌詞は、紙の花嫁人形が泣いたら涙で紙が



花嫁人形

の涙」を始めて確認ができた。更に、種々の資料や教授を得た。「さける・泣くに泣かれぬ」の意味は前述通りである。問題の「嬉し涙か、悲しい涙か」については、幾多の資料から、当時の時代背景や、困窮の中で母の結婚を思うと、

切れる。即ち「鹿の子の袂がぬれる」(原作はきれぬ)。紙が涙で切れるため「泣くに泣かれぬ」の表現は、母の境遇への悔やみに耐えている意と知った。

更に、氏から①の花嫁人形の涙について、「落谷虹児記念館に展示されている「花嫁(1968年作)」の絵を見て来なさい。文金島田の花嫁さんの右目のまつ毛の下の頬に、薄らと一滴の涙が白く描かれている。落谷虹児記念館の名誉館長の落谷龍生(虹児三男)氏が最初に気付かれた由。某氏から館の学芸員を紹介され、早速新発田へ向かった。学芸員の説明により「ひと筋

**お店紹介**

**「ハチヤカメラ店」さん 二瓶 芳枝**

新潟市西厩島(にしようまやじま)町の「こんぴら通り商店街」は、かつて新潟で最初の芝居小屋が立ち、映画館が数館あり商店が賑わい、新潟で最初の繁華街だった地域と言われています。

商店街入り口には奉納和船模型が納められている金比羅神社があります。期せずして今年四月に文化庁が認定する日本遺産に「北前船寄港地・船主集落」として新潟市、及び豪商の館等一一件が構成文化財に選ばれました。この朗報を見越したように、こんぴら通り人の活性化に取り組んでいる人がおられます。

ハチヤカメラ店のご主人、小林豊朗さんです。小



こんぴら通り「ハチヤカメラ店」とご主人

林さんがカメラ店を当地に開店したのは昭和三十年。店主「ハチヤ」の名前の由来は昆虫の「ハチ」を店に例えて、お客様は「花」。お客様と共存し、良いお付き合いをしたいと思います。当時カメラは高級品で、一般的に愛好される製品ではありませんでした。個人よりも各企業、病院、公官庁等がお得意様でした。

その頃の商店街はどんな様子だったのですか。

「堀を介して物流が発達していた。近隣農家が小舟に野菜を積んで売りに来ると、帰りは肥やしを運んだ。夕方にはリヤカーに品物を乗せて売りに来た。近くには楽しい遊び場があり、夜十時頃まで芝居や映画を見に集まっ

**まち歩きのご紹介 (二瓶 芳枝)**

路地連胎内様開催の「旧宿場町・中条の小路と水路をプラタモリ」に参加し、お話を伺いました。

団体名	: 路地連胎内	会員数	: 5名
設立	: 2016年4月		
設立の契機	: 観光ボランティアガイド研修を契機に設立		
活動	: かつて宿場町であった中条のまちあるきガイド。9月5日(火)には、中条祭りに合わせた、まち歩きを開催。中条に花街があった頃から続く、芸者を乗せた山車(だし)と踊りが見たいものです。		

た人達で賑わい、ここから坂内小路、古町へと流れて行った。

お話聞いてみると、粋な新潟、湊町新潟の風情が感じられました。

現在のハチヤカメラ店は息子さんを中心にカメラ専門店、一般写真用品の販売や写真・ビデオ撮影等、幅広く営業をしています。その傍らご主人は北前船寄港地・新潟をアピールする散策ルートをお考えになったり、新潟開港一五〇年に向けて益々「こんぴら通り商店街」の活性化にご尽力されています。